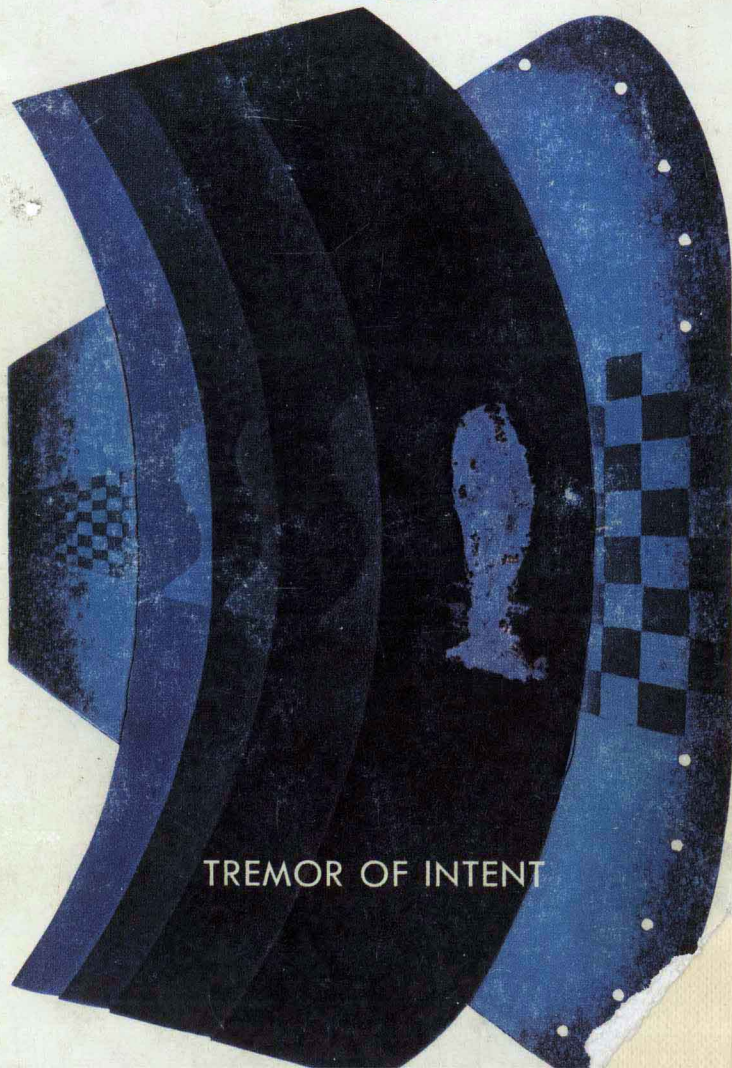


アントニイ・バージェス選集

⑥

戦慄

飛田茂雄訳



TREMOR OF INTENT

アントニイ・バージェス選集

⑥

戦慄

飛田茂雄訳

TREMOR OF INTENT

早川書房

訳者略歴 昭和2年生，昭和32年早
稲田大学大学院博士課程修了，中央
大学教授・英米文学翻訳家 主訳書
「キャッチ=22」ヘラー，「ジェイ
ムズ・ジョイス」レヴィン（以上早
川書房刊）／他

TREMOR OF INTENT

by Anthony Burgess

Copyright © 1966 by Anthony Burgess

First published 1978 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by direct arrangement with

Deborah Rogers Ltd.

〈検印廃止〉

『戦 慄』

1978年8月31日第1刷

定価1300円

著 者／アントニイ・バージェス

訳 者／飛田茂雄（とびた しげお）

発行人／早川 清

発行所／株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2 〒101

電話(254)1551(代)／振替東京・6-47799

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします

0397-910010-6942

戰

慄

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1978 Hayakawa Publishing, Inc.

感謝をこめて

外科医丁・マクマイクルに捧げる

だが、昼と夜のいずれを選ぶのも
万人の自由であり、光は等しく注
ぐ、白にもまた黒にも。

——W・H・オーデン

政治家から盗人にいたるこの世の
悪党どもの大多数について言える
最悪のこと、それは彼らが永遠の
罰を受けるにも値しない人間であ
るという事実だ。

——T・S・エリオット

第一部

目下の情況は以下のとおり。ぼくは予定どおりヴェニスから、例の美食を楽しむ船の旅というやつに途中参加した。そしてこの大型観光船ポリオルビオンはいま小刻みに震動しながら、アドリア海特有の輝かしい夏空のもとを南東に向かつて進んでいる。ユーゴのブリー市では万事順調。D・Rが三日前に到着して交代してくれた。ふたたびワイン・グラスをしきりに傾けながら、ひと晩、かつての冒険のくさぐさを大いに語れたのは愉快だった。体調は上々。もっとも、ふたつの慢性病、つまり暴飲暴食と性欲の異常昂進、これだけは相変わらずだが、まあ両方がいつもおたがいを抑制しつづけている。この外国航路（あさってはもう黒海にはいるはず）では、どちらも満足できるチャンスなどまずあるまい。ただ、任務を果たしてこの長旅から帰っ

たあと、ホツとして裸になれる一週間の休みのことをしきりに考へては無聊を慰めているらしい。イスタンブール、コルフ、ヴィルフランシュ、イヴィーサ、サウサンブトンと大きくひとまわりをして、やつとおしまい。自由の身だ。少なくともぼくにとっては。だが、あの哀れなローバーはどうなることか。

D・Rは打ち合わせどおり、PSTXのアンブルを渡してくれた。もちろん注射器は自分のを持つているし、やりかたは心得ている。気の毒に、ローバーの生霊が早くもこの一等船室のもうひとつの寝台に横たわっている感じ。船の事務長には、友人のイニス氏が予期しない所用のためマールレイターに行つたが、もうそろそろバスか、汽車か、連絡船かなにかでヤリリユークへ向かつたはずであり、その港からきつと乗船するだろう、と説明しておいた。事務長のいわく、そのかたが利用なさらなかった千五百海里分（つまりは、その間の鯨飲馬食と女あさりの意味だがね）について払いもどしはしかねることさへはっきりご了承いただいておりますから、けっこうでございます。これでこつちも大助かり。ローバーに関しては準備万端ととのつてゐる。彼の新しい名前や身分をも含めてね。肥料研究の専

門家、ジョン・イニス氏というわけ。イニスの旅券のなかで、メトフィッツ出身のあの男のゴム製みたいな髭面がもの悲しげにこつちを見返す。あいつは——あの多目的用の没個性人は——生涯にずいぶんいろんなものになったじゃないか。ムディーナではボン引き、パライオカストリッツァでは電算機のような頭脳を持った梅毒病みのこそ泥、ちやんと式文を心得たちびのギリシャ正教助祭R・J・ガイスト師、それにプリンディウムでは、なんと少年相手の男色の容疑で追われている有名なウクライナの作家にまで。そして今度はジョン・イニスだが、こりやまあ、生ゆでローパーに対する保温用ゆで卵蔽いともいうところか。

女王陛下の政府がぜひとローパーを連れもどせと切実に要求しておられることは、とくと理解しておりますよ、先輩。特に、ロケット燃料研究の難問題に突破口が開けたというタス通信の得意げなニュースが流れ、ユーロビジョンでメーデー祝賀当日のモスクワ上空を滑走する悪魔的なヘビーストの姿が放映されたあとの議会での質問から、よくわかる。あまりピンとこないのは、ローパーを本国送還させる役目を、よりによってなぜこのぼくにまわしてきただかだ。そりや確かにぼくは、十五年という年月を「課」

のために働いてきたし、その間に、こう言っちゃ生意気だが、純粋な信頼、究極的な信頼を勝ち得てきたとは言えるでしょうがね。それにしても、同級生への同情のひとかけらくらいは残っている。そこは貴兄にもわかってもらえるはずだが。ローパーが祖国を裏切るまで、ぼくらが、（戦争と平和、彼の結婚、ぼくのプリー赴任といった）多くの溝はあったにせよ、一種の表面的な友情を保っていたという事実はね。西側への彼の最後の連絡はぼく自身宛ての絵葉書だった。文面はまるで暗号でね。たぶん、いまでも暗号班の連中が穴のあくほどにらみつけていることだろう。へ、四時二分前——彼らのパイプはみな立って——殉教者たちの血がそのなかを流れる、——というんだ。ローパーについていくつかの点をすっきりさせておこう。まず、「第一手段」は絶対にうまくいかないと思う。どんなものを餌にして説得しようと、ローパーがおいそれと帰国するなんてとうてい考えられない。あの男は過去を断ち切ることに關しては、科学者らしい徹底ぶりを見せる。すでに捨てられた古い答をあらためて探り出すような人間ではない。かりにローパーが異端者であるとしても、彼が同意するのは貴兄のと同じ異端説——つまり、人生の改善は可能であり、人

間により氣高くなれるという信念——なのだ。そいつがなんと途方もないたわごとかと指摘するのは、もちろんぼくの役目じゃない。なにしろこちらは優秀なテクニシャンにすぎないから、哲学を論じるなんてがらじゃないんだ。

ローバーに対する手段が、第一に説得、第二に力ずくとふたつある理由は、言われるまでもなくよくわかっている。なにしろ選択の自由があったとなれば、大きな宣伝価値がある。もっとも、ぼくの上着の裏地の内側に隠れている確実な筋からの手紙は、ものすごい額の金で彼をおびき寄せているが。それでいて、一カ月かそこらすれば審問だろう。とにかく、ぼくはこれからローバーと対決する。ぼく自身としてではなく、セバスチャン・ジャガー氏（もちろん、ぼくの偽旅券にあのゴム人形みたいな男は無用だった）として対決するつもりだ。タイプライターの専門家、ジャガーか。どうせならクワート・ユーイオップでな名でもよかつたろうに。ジャガーは上陸すると、どこかのレストランのトイレですばやく、完全にスラブ民族と見える人物に化けて、人の目をくらませてやる。そして、もし万事が順調に進むなら、どこであろうと夜のその時間にローバーが科学者会議の他の代表から離れるために行っているところま

で、タクシーを飛ばす。そのあと正体を現わすのは、昔ながらのこのぼくであり、非常に手慣れた過去のやりかただ。そいつは、彼になんの答も与えなかった西側のある一国の匂いにするだけでなく、ローバー自身の匂いもする昔のやりかた。もはや捨てられた古い方式さ。

ローバーを説き伏せることは可能でしょうか。いやそれより、このぼくがそれほどの説得力を心のなかに見いだせると、先輩はお考えですかね。（これはぼくにとって最後の任務だから、いまこそ大胆に言えるのだが）ぼくは相手を納得させようと思うほど充分に自分でも納得しているのだろうか。どこまで確信を持っているのだろうか。すべてはおそろしくでかいゲームだった——大量虐殺の諸方式、ロケット工学、絶対に確実な早期警報システムなどはみなそのゲームの数取り駒にすぎなかった。だが実のところ、だれもがだれひとり殺しはしない。この巨大殺害という観念は、鑽石だのなんだのという中世のたわごとと同じくらい現実からは遠いものだ。いつの日か人類学者たちは、集団的自殺などという考えをくそまじめにもて遊んでいるわれわれの愚かさを、（驚嘆の念をおだやかに隠しながら）批判することになるだろう。ぼく自身について言えば、ぼ

くはいつも、敏捷で、手先が器用で、語学の才にたけた、クールで優秀なテクニシャンであるというゲームを演じてきた。だが、それ以外のぼくはひとつの虚空にすぎない。いろいろな熟練のいっばいしまった黒い袋にすぎない。ぼくにも人生の夢はある。しかし、どれかひとつのイデオロギーが他のイデオロギーにましてその夢を実現させてくれるとは全然期待していない。夢って、つまりは、ぬくぬくとしたアパート、ふんだんな酒、レコードプレーヤー一台それにヴァーグナーの傑作『ニーベルングの指輪』全曲のレコード。もともと、ほかの欲望なんか全部ぶっ潰してもいいと思ってたんだ。なにしろ、それらは病気の徴候だし、病気がつてやつはやたら金がかかるだけでなく、人から自己充足感を奪うからな。例の麻薬一味に関する任務を遂行中、モハメディアで会ったある医者が、欲望も自己充足もいわば同族なんで、ちょっとした手術でどちらもかならずうまいくいと、胸を叩いてぼくを説得した。とどのつまり、ぼくはイングランド北部の巨大な湖のほとり、四方を針葉樹にとりかこまれ、酸素と葉緑素に満ち、霧のなかから外輪船の汽笛がポッポと聞こえてくるような湖のほとりに、大きな丸太組みの家が一軒欲しいと思っている。外

輪船メニッケ号のバーには魅力的な名前のお酒——ユハーヌス、フーティークー、エデュスターヤ、クライツカ、シルメツバリー——の壺がずらっと並んでおり、個人収入がどっさりある船長は、みんなにタダでおごってやるほど酔っぱらっているが、ちっとも不愉快な酔いかたではない。その船ではよだれの垂れそうな食事が出る——小さなきゅうりのピクルスを添えた塩漬けの魚や、焼いたライ麦パンにのせ、スパイスをカリッとさせた銀色に光るステーキなど。それに、見知らぬ者どうしの野性味溢れる性愛を求めてピクピクしている、挑発的な金髪の娘たちもいる。いつかきつとその手術を受けるぞ。

心理学者の鑑定書なんかじゃなく、ぼくの分泌腺をよく見てくれ。ぼくは精神的にも道徳的にも健全だ。「ああ神よ、わたしを清らかにしてください。でもいますぐにはなく」と言ったセント・オーガスチンなんかお呼びでない心境。無責任で、日記に人と会う約束をちゃんと記すこともなく、自由意志を廃棄している。もし貴兄がほんとうにこの報告書を読むとしたら、たちまち眉をひそめて、セント・オーガスチン（と言っても、ヒッポ・レギウスのあの聖アウグスチヌスじゃなく、同じくらい偉いけれど、もっ

と退屈なカンタベリーのオーガスチン」とローパーとぼくとの關係を嗅ぎ出そうとすることだろう。セント・オーガスチンは、ブラッドキャスターのカトリック系中等学校の守護聖人だった。その学校でローパーとぼくは同級生だった。貴兄のフアイルにその学校の名はのっているが、その匂いや、学校をとりまく市の匂いまではのっていない。ブラッドキャスターはなめし皮工場や醸造工場、駄馬、運河、壁の古いひび割れを埋めた泥、煉瓦の屑、市電の座席の板、小間切れ肉の料理、肉汁のかかったホット・パイ、牛の足肉のシチュー、ビールなどの匂いが漂っていた。詩人ルーパート・ブルックのイギリスや、貴兄のイギリスの匂いとはまるでちがう。学校はカトリックの匂いがした。つまり、僧衣の厚い黒地の布、古かびみたいな香煙、聖水、断食行者の息、魚の干物、禁欲生活の緊張といった匂いだ。ふつうの通学学校^{デイスクリ}だったが、四十人ばかりの寮生もいた。ローパーとぼくは南部からの——ぼくはケント、彼はドーセットからの——亡命者といったところで、家からとても遠いために寮に入っていた。ふたりとも奨学金を申請して、うまくもらえたんだ。カトリックが経営する最良の学校は北部にある。というのも道理で、英国の宗教改革も、動脈硬

化を起こした人間の足の血液と同様、そうやすやすとのし上がるわけにはいかなかったからだ。もちろんカトリック色濃厚なリヴァプールがあるが、これは墮落したダブリンってところか。ま、そういうわけで、ぼくらは古きカトリック教徒たち、移植されたアイルランド人のなかで、南部からのふたりの亡命者だったわけ。親父が領事館につとめる変な外人という役まわりさ。ぼくらもカトリックだったが、アーの音をやけに伸ばす英語を話すものだから、プロテスタント信者みたいな話しかたでね。ぼくらの語調は、母音をきちんと発音する正統派の連中とは異質だった。ローパーとぼくはこの成行きから当然のように親しくなった。机もベッドも隣り合わせ。といって、同性愛めいた關係は全然なかった。むしろおたがいの肉体には嫌悪感さえいだいたらしくて、親しい生徒どうしなら当りまえみたいな取っ組み合いも、全然やらなかった。ぼくは、寝るときやシャワーを浴びるときに見えるローパーの肌の白さに少々へきえきしてたんだな。そこから腐臭が漂ってくるような感じでさ。異性愛か。そいつはつまり姦淫を意味していたわけだ。結婚した男女のあいだ以外での異性愛の行為は死に価する大罪だと、それだけはきわめて明確に教えこまれて

いた。ただ、ぼくらの理解では、イギリス人よりも前にカトリックの教義を受け入れていた外国人どもは例外で、彼らはなんというか、創立会員の特権を保有していたらしい。

それは、五年級（高校二年生に相当する）に属する、ちびのクリスト・ゴメス、アルフ・ペレイラ、ピート・クエヴァル、ドンキー・ケイマスといった色浅黒い外国人たちでね。連中は金を持っていて、女（マール・ストリートとロンドン通りの角あたりをうろついていた女たち）を買い、それを廃用になった美術室だとか、クリケットの選手室だとか（当時、ジョルジュ・ド・トルムという毛深い男が、第一軍のマネージャーをしていた）、なんと新築の礼拝堂にまで連れこんだ。ところが、なまなましい犯行現場を見つけられて、スリルたっぷりの放校処分という儀式で万事おしまい。礼拝堂の通廊でうごめくお尻を見下ろして、聖餐式用のご聖体はなんとお考えになったろうね。校長のバーン神父はセックスに対してはえらくきびしい人で、それを思うと、よくもまあいろんなことがばれずにすんだと不思議なぐらいだ。この校長はときどき夜になってから、ストリートで飲んだ「J・J」の匂いをブンブンさせて寮のなかを見まわり、不純な思いに駆られたやつを探るために、毛布の下に手を

入れる。何度か毛布の下に特別豊かなものを発見しては、寮の片隅に立ってセックスの悪についてお説教を垂れたものだ。彼はアイルランド人らしく、芝居に関してはすばらしい勘を持っていてね、部屋の電気をつける代りに小型の懐中電燈で自分の憤怒の形相を照らし出す。地獄の火の上で敢然とにらみつける、ぶった切られた聖徒の首というところさ。ある晩、バーン神父はこう切りだした――

「生徒諸君、この呪わしきセックスは――ああ、このことばをただ耳にただだけで、諸君はベッドのなかでのたうつても当然だろう。この現代の悪はすべて、けがらわしい性欲から、はずむベッドの上の雄犬と雌犬との行為から生まれる。手足は牽引車みたいに動き、明瞭なことを発するために神から与えられた口や舌は、萎縮して、もだえや呻きや喘ぎの音だけを発する。恐ろしい。おそろしいことだ。神とご聖母の前において言語道断の所行だ。情欲は他のあらゆる大罪の源であり、肉の誇り、肉の渴望、欲求不満への怒り、消耗した肉体をふたたび情欲に駆り立てんとする大喰らいの罪、他人の性的能力や性的成就に対する嫉妬、氣力を喪失させる性欲の白昼夢を受け入れようとする怠情などへと人を導く。それは神の聖なる恩寵による結婚生活